清流通信
四万十川物語
Shimantogawa Monogatari
第 169 章 通信日 ● 2010 年11月 25日

〈送信者〉
財団法人 四万十川財団
TEL：0880-29-0200
FAX：0880-29-0201
E-mail: office@shimanto.or.jp
URL:http://www.shimanto.or.jp

四万十の森を見続けて。森を守る人＝森林官　四万十町・梼原町

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は四万十町から、四万十の森を守る森林官、森下嘉晴さんについてお伝えします。

久保谷山 風景林

四万十川上流域、四万十町の山里にたたずむ松葉川温泉から、県道 322 号線を梼原方面に登ること 15 分、四万十町・梼原町の町境にある春分峠にたどり着く。標高 730m のここからは、晴れた日には太平洋が望める。四万十川の清流を育んできた四万十の森、久保谷山風景林とは、この春分峠付近に位置し、太古からの原生林がダイナミックに循環しながら世代交代を繰り返す“生きた森”だ。 林相は、大径のモミ・ツガ・ヒノキなどの針葉樹とアカガシ・ウラジロガシ・ヒメシャラなどの樹高２０～３０mの広葉樹が混生する、暖温帯を代表する天然性針広混交林だ。
そして、久保谷山風景林を含む松葉川側の国有林を管理するのが、『四万十森林管理署中津川森林事務所』だ。
そこの森林官である森下嘉晴さん（44 歳）に案内されて、秋深い久保谷山を歩きながら四万十の山の話を伺った。

森林官 の 仕事

森林官、森下さんの仕事は、一言で言えば“国有林の管理”であるが、森林づくりを進めるための各種調査、植林・伐採・林道等の管理事業に係る監督や検査、森林パトロール、境界の管理、動植物の調査･･･等と、多岐にわたる。
森下さんは、十和→梼原→四万十町と、四万十川流域で森林官としてのキャリアを積んできた。特に、この春まで勤務していた梼原町では、松原セラピーロードの整備やガイド養成、モニターツアーなどの仕事にも関わってきた。
森の魅力を多くの人に知ってもらいたいと、自らが森林セラピーの資格も取った。
「松原セラピーロードに沿って流れる水路は、人が胎内にいる時の母親の子宮の血流と同じ速度で流れていると言われています。人が一番安全だった胎内にいるときに聞いた流れにシンクロするから、癒されるのでしょうね。」
なるほど、あの小道を歩いた時の穏やかな気持ちは、そういうことだったのだと、今にして納得できた。
「僕自身は梼原勤務の時から、山の魅力、山の楽しさを感じるようになったのです。だから、もっと多くの人に木と山の魅力を知ってもらいたい。そこから次の可能性が広がると思う。」
かつては“木の文化の国”だった日本。その時のように、もっと木を使う習慣を復活させたいと願う。
「かつてのように、人が山に戻ってくる政策の必要性は感じます。今注目され始めた CO2 吸収とか、木のもつ付加価値についても考えますが、やはり一本の木も無駄にしない、循環型社会が来ることを願いたい。」

植林に託した、日本人の想いを感じて

「僕は、天然林は大好きだけど、そればかりがよいとは決して思わないのです」
春分峠の四万十町松葉川側に広がる緑の海原のような人工林を見つめながら、森下さんはそう話し始めた。
「“植林”という作業は、木の文化の国の“日本人がしてきた偉業”だと思うのです。たとえば、あそこに見える崖っぷちに植えた木がある。植樹は 2～3 月にするのですが、朝早く寒く暗いうちから、苗木を背負って山に登り、必死の思いであの木を植えたのだと思うのです。昔は労働力として女の人も多くいたようです。植えた木の根元には、前掛けなんかで土をすくって運んで大事にかけたんでしょうね。植樹された森を見ると、先人の努力をうかがい知る事が出来る。植林は、日本人の山への想いが託された“遺産”であり、“偉業”です。この資源は、自分たちの責任で、未来につないでいかなければならないと思う。 僕の仕事はそういうことなのだと考えています。」

“分水嶺” という 分かれ目

久保谷山の尾根伝いに先を行く森下さんが、急に立ち止まり、そして振り返って教えてくれた。
「ここが“分水嶺”です。ここを境に、こっち側が四万十川水系へ、あっち側が梼原川水系へ、降った雨がこの山稜で分かれ流れていくのです。“分水嶺”っていい言葉ですよね。」
ああ、そういう事だったのか･･･森下さんに教えられるまで、“分水嶺”という言葉の意味を深く考えることもなかった。幾度となくむかえた自分自身の“人生の分水嶺”。それは水が流れるごとくに、あるべき必然の方向をたどってきたのかもしれない。そのことに思いをはせた時、この何百年も生きてきた森の木々に、私の人生までもがすっかり見通されていたかのような、不思議な気持ちが不意に訪れたのだった。 そしてなぜかそのことが、心地よい安心感となって、私の心に柔らかく広がっていった。